琉球大学学術リポジトリ

沖縄・国頭村奥シヌグの祭祀植物イヌガシ

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学農学部
	公開日: 2015-09-02
	キーワード (Ja): シヌグ, 祭祀植物, イヌガシ, 蓮型, 沖縄
	キーワード (En): Shinugu, religious ceremony plant, Neolitsea aciculate, lotus type, Okinawa
	作成者: 新里, 孝和, 芝, 正己, Shinzato, Takakazu, Shiba, Masami
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/31755

沖縄・国頭村奥シヌグの祭祀植物イヌガシ

新里孝和[1*], 芝　正己[2]
[1]国頭村文化財保存調査委員/沖縄県文化財保護審議会専門委員,[2]琉球大学農学部亜熱帯地域農学科

Neolitsea aciculate(Bl.) Koidzumi use in Shinugu, a religious ceremony in Oku village, Kunigami, Okinawa

Takakazu SHINZATO,[1*]and Masami SHIBA[2]
Kunigami village cultural properties preservation survey member/Expert commission member of Cultural Properties of Okinawa Prefecture
Department of Subtropical Agro-Production Sciences, Faculty of Agriculture, University of the Ryukyus

キーワード：シヌグ，祭祀植物，イヌガシ，蓮型，沖縄
Keyword: Shinugu, religious ceremony plant, *Neolitsea aciculate*, lotus type, Okinawa
*Corresponding author (E-mail: shinri@trad.ocn.ne.jp)

奥区のシヌグ

沖縄のシヌグの祭祀植物の特徴は、葉が常緑性、全縁、それに祭祀植物分類の合掌型として対生葉序であることが重要であるが[1)]、国頭村安田区と奥区のシヌグ祭祀に供用されるゴンズイは対生葉序であるものの、羽状複葉で小葉の葉縁には鋸歯があり、さらに大方は落葉樹の性質を示す. それにもかかわらず、シヌグ祭祀植物にゴンズイを供用する所以については、とくに国頭村安田区を中心に論述した[2, 3)]. ゴンズイの枝葉の形状や性質は、中国の民間信仰に広く伝承されている落葉性で互生葉序、単葉・鋸歯縁の性質をもつ桃に起源し、その習俗が日本の照葉樹林地域に渡来して土着信仰に影響を及ぼし、各地に深く浸透していって、ついには桃に由来する祭祀植物が普遍的にまた沖縄の十字対生葉序のように地域の特性を生みだしたのだろうとされた. その中でも普遍的要素をもち一般的に用いられるゴンズイが古い時代に沖縄に伝わり、シヌグ祭祀の時期に美しく裂開する果実など樹種の性質に信仰の意味を込めて国頭村安田区その他の村落のカーブイ・ハブイ（冠）に飾られるものと考えられた.

奥区シヌグのハブイにも安田区と同じように稲藁とナガバカニクサのガンシナー（鉢巻き）に裂開した果実の着いたゴンズイの枝葉が飾られる. しかしシヌグ祭祀の隊列をなす神男たちが手に持つ、1 m から 2 m長の木の幹や枝葉の杖棒は、安田区では身近にあるいろんな樹種を手折って用いるが、奥区ではイヌガシ１種である.

通常、奥区シヌグは旧７月盆後の最初の亥の日に行われ、当日の午前８時頃になると部落の男たちはアサギの庭に集まり、ヤマジー班とシバシジ班の二手に分かれる. 奥区の２班の区別は安田区のように門中や血縁などある程度決められた組分けがあるわけではなく、それぞれ人数や各人の体調などの具合をみながらどちらかの班に分かれているようである. 各班は部落の在住の人、出身者、一般参加者が混成して適当な人数に分かれ、それぞれ軽トラックや乗用車に便乗し、山登りの入口の拝み場の方へと出発する. 2011 年８月 25 日（旧歴７月 26 日子の日）はヤマジー班、2013 年８月 25 日（旧歴７月 19 日亥の日）はシバシジ班（カイジヤマ・フイジヤマ）に参加した. 人数は総勢 4、50 人くらいである. 2011 年は子の日（木曜日）であるが、沖縄中南部の郷友会の便宜を図り、続けて土・日曜日に開催される国頭村の村祭りに合わせてシヌグ祭祀を行ったと聞いた.

午前８時 30 分ヌンドゥルチに拝みをして、25 人くらいの男が各人ヤマジー班の車４台に乗って山登りに出発する. 5, 6 分でシ―バヤマ（志場山）のヤマジーの入口に着き、御盆に米と酒をのせ、役の男が沖縄線香を奉げて全員拝みをする（図１）. 奥区の方言名でシバヒと称するイヌガシはその時期に果実が着いているが、まだ青くて熟するには至っていない. イヌガシは通常は森の亜高木層以下に生育し低木状であるが、大きいものでは高木となり高さ 10～15m、直径 10～30 ㎝に達する[4)]. 男数人が森の中に入り、シヌグ祭祀の大きさに必要なイヌガシの立木を捜し歩く. 3, 4 本の立木を選び、丑年

か未年生まれの者が担い手となり、参加者が紐や体を使って左右に7回大きく揺すって幹を折り倒す．もとのヤマジー入口に近い広い場所に男神たちが再び集まり、いくつかの枝を長さ50㎝～2mくらいに手折って各人に分配する．男神たちは各人ともイヌガシの枝葉を担いだり手に持ったりで、ヤマジーの傾斜面の細い山道を600mほど下って、9時30分頃丘の上のミヤギムイ拝所に着く．ここでもう一つのシバシジ班が来るのを待って時間調整する。10時20分頃シバシジ班の太鼓の音が聞こえてきて、この地点からは太鼓を先頭にして、太鼓の音とヤマジー班の「フーヨーサレー」とシバシジ班の「ヘイヘイサレー」を互いに掛け合いながらミヤギムイの階段入口で二つの班が合流する．

図1　ヤマジー班；ヤマジー入口で線香を立てて拝礼する（2011年）

郵便局前で隊列を組み、待っていた女性たちが準備していたゆかたを着け、安田区と同じような稲藁・ナガバカニクサのガンシナ（鉢巻き）に、列開した紅い果実の着いたゴンズイの枝葉を挿してハブイ（冠）を作り、それを男神たちが頭に被る．沿道には大勢の女性や山に行けなかった老人や子供や他所からの見物人が、男神たちの一挙一動を見守っている（図2）．

図2　頭にハブイ、手にイヌガシの杖棒を持つ男神たち（2011年）

部落の入口にはカミミチ（神道）があって、ハブイを被りイヌガシの杖棒をもった男神の隊列はそのカミミチを左回りに通常7回回るようであるが、太鼓の音と「フーヨーサレー」「ヘイヘイサレー」の掛声を交わしながらその日は猛暑のせいか5回くらいであった．次に村の祭事を行うアシャギマー（庭）に移動し、ここでも回るのは通常の7回が今日は4，5回であった．次はシヌグモーで、左回りの7回がやはり4回くらいになって回るのだが、カミミチとアシャギマーと異なるのは隊列の円陣の中心に1、2名の者がイヌガシの杖棒を地面にたてて立ち、回っている隊列の要の役を果たしているようにみえることである．円陣の中心に立つ者はやはり丑年か未年生れの者で、年によって人数が違うらしい．

2013年のフイジヤマに上るシバシジ班は15名くらいの男神が車に便乗して8時30分頃に出発した。以前は林道を通ったが河川工事の際に道路ができたので、今はこの道を利用して車でやってくるようになったという．ヤマの入口で線香を捧げ、斜面を1列縦隊で上っていく．隊列は目的地のヤマを間違えたらしい、着いた場所はイヌガシが極端に少ない林相で、シバシジ川の谷をもう一山越した場所が本来のシバシジであった．9時40分、シバシジで適当なイヌガシを見つけ、一息ついてからイヌガシの立木の根元に酒を捧げ、拝礼し、立木に酒を注ぎ、男神たちに杯を回す（図3）．

図3　シバシジ班；選定したイヌガシの根元に酒を捧げる（2013年）

枝葉のできるだけ多いものを選び、役の者を中心にして幹を手折る．今回は手折った後に裂けた根株の方を更に鋸で伐ったが、そうすると萌芽の状態がよいということである．選定木は3本、高さ2.5～4mくらい、切口の直径が5～5.5cmであった．最初のヤマの入口まで下り、そこで手折ったイヌガシの枝を切り分け、杖棒を持って部落に向かう（図4）．

2011年同様に、ミヤギムイ拝所の前でヤマジー班と合流し、郵便局前で隊列を組んでゴンズイを挿したハブイを頭に被り、カミミチ、アシャギマー、シヌグモーと順に回り歩く．最後に海岸に行き、海に向かって祈り、米と塩と酒を盆にのせ、酒を海に捧げ、正午前にイヌガシの杖棒とハブイを海に流す．かつてはハブイやイヌガシの杖棒は全部海に流したそうだが、

図４　シバシジ班；イヌガシの立木を７回大きく揺すって倒す（2013 年）

今は海を汚さないようにと、海に流すのはその一部で多くは海岸のアダン群落の林床に置く．折口[5]の「天鈿女命」では、神楽の手草とは手に持っている物忌みの印で、採りものは榊・矛・弓など手に持って振り廻すもので、魂をえぶり呼び覚ます道具であり、祭りの場合に木を持つとその人が精霊になり、木を離すと普通の人に還る訣になるという．シヌグ祭祀の時に海辺で、ハブイを取り去り手に持つ杖棒を海に流すのは、神になり身に宿した精霊を放ってもとの男になり、魂の道具、つまり柴は海の彼方の神の世界へ送ることを意味するのだろうか（図５）．

図５　海辺で祈りを捧げハブイと杖棒を海に流す（2011 年）

シヌグ祭祀の植物観でイヌガシは蓮型に分類され[1]、葉は互生葉序でらせん状に枝端に束生し蓮の花冠のようになるが、西日本の照葉樹林域の祭祀植物のどの樹種に関連しどのような意義があるかは明らかでない．安田区では部落で待っている女性や山に行けなかった年寄りたちの頭や体を、男神の持つ木の枝葉の杖棒で祓うが、奥区のシヌグの男神はイヌガシの杖棒で部落の人たちを祓う仕種がなく、肩に担いでカミミチを回り歩き広場で円陣をつくって声を掛け合いながら回るだけである．

イヌガシはゴンズイのようにハブイに挿すのではなく男神たちの杖棒に使われるので、シヌグ祭祀とイヌガシの信仰の結びつきは、手段としての樹種の性質や枝葉の形と、習俗としての杖棒の意味を探求する必要があろう．男神たちは里山で適度な大きさのイヌガシを見つけるのだが、その大きさは彼らの仕草ややり取りを聞いていると、幹が太すぎて手折ることが困難なものや、小さく貧弱で手応えがなく枝をみんなで分けるのが困難なものを除いて、小ぶり[6]で手折ることができ、豊かに枝葉の分配ができ、そして次年以降のために萌芽が期待できるもの、という内容である．イヌガシの立木は里山のヤマジーとシバシジの林分でよく生育しているが、シヌグに適するものを見つけるには時間が掛かりある程度の経験も必要のようである．

祭祀植物にイヌガシを使うのは奥区の特異な習俗なのか、杖棒はイヌガシに特定されているものの、その意味についての伝承は聞こえてこない．イヌガシは照葉樹林域の祭祀植物の特徴である常緑性や単葉で全縁の性質をもっているが、おそらくその材は薪燃料の柴木に使ったとしても、これまで村落の主要な木材資源にはなっていないであろう．シヌグのヤマに上るシバシジは、イヌガシその他のシバ（柴）が採れるシジ（高所）の意にとれそうである．小野[7]は南島の民俗文化を生態史から、山地の島の照葉樹山地型文化と平地の島の海洋性平地型文化の二つに分類した．照葉樹山地型文化において、安田区シヌグ祭祀の男神がもつ杖棒を身の丈より高い木の柴枝といっているが、頭から身体まで緑の葉で被って扮装した男神たちは「山頂に向かって坐り、太鼓を合図に山の方を拝み、海の方を向いて拝む．次に円陣を作り、回りながら木の柴枝で地面を叩きスクナーレ・スクナーレと唱える」とある．また、奄美大島秋名では男神たちがシュチュガマを作り、それを右に左に揺って倒してしまうという．

奥区シヌグは両班とも里山の林内でイヌガシの立木を揺すって倒す．揺すり倒す行為は、奄美大島のシュチュガマと同じ意味があるのか、他の地域でも同じような神祇があるのか、興味深いものがある．奥区シヌグは部落のシヌグモーで円陣の中心の者が枝棒を立て、隊列の男神たちはその周りを回る．ヤマジー班の「フーヨーサレー」とシバシジ班の「ヘイヘイサレー」の掛け声は互いを確認しながら山神と交信する木霊の表現のように感じる．さらにイヌガシの互生で枝端に束生する葉序の形態が蓮型に値するのか、琉球列島のシヌグ祭祀の大方は照葉樹林域の神仏行事に由縁するようであるが、土着信仰の起こりや稲作文化とのつながりについても洞察しなければならないだろう．以上の事柄を吟味しながら、奥区シヌグの杖棒に供用されるイヌガシの意義について論考してみたい．

イヌガシの自然分布と方言名

クスノキ科シロダモ属は日本に２種を産する．シロダモ（Neolitsea sericea(Bl.) Koidzumi）は常緑高木で、宮城県、

山形県以南、四国、九州、琉球、小笠原、南朝鮮、中国に分布し、日本の暖地の山林に普通に生育するが、とくに低地や沿海地に多産する．もう1種のイヌガシ（Neolitsea aciculate(Bl.) Koidzumi）は常緑小木で、通常、幹の高さ4mくらいになり、暖帯林域の房総半島以西、四国、九州、琉球、台湾、朝鮮に分布する[8]．琉球列島では、奄美大島、徳之島、沖縄島、伊平屋島、伊是名島、久米島、石垣島、西表島、与那国島の非石灰岩地の山地林に生育する[9]．

植生分類学から琉球列島の常緑広葉樹林は、植生の生育基盤である地質土壌を反映して非石灰岩地域の暖温帯系樹種が多く生育するリュウキュウアオキ（ボチョウジ）ースダジイ（イタジイ）群団と石灰岩地域の熱帯・亜熱帯系樹種が多く混生するナガミボチョウジークスノハカエデ群団に二大区分される．これら二つの森林植生は、さらに関東～南九州に分布するヤブコウジースダジイ群団、サカキーウラジロガシ群団とともにヤブツバキオーダー、ヤブツバキクラスの上級単位にまとめられる．そのオーダー、クラスの標徴種または区分種としてタブノキ、スダジイ（イタジイ）、イスノキ、ヤブニッケイ、ヤブツバキ、サザンカ、イヌガシなどがあげられている[10]．イヌガシは全国の照葉樹林の林相の一般的な構成種である．

イヌガシは琉球列島の非石灰岩地の森林群落において出現頻度が高く、小野[7]が唱える照葉樹山地型文化圏の、里山から奥山の森林の亜高木層以下の小高木～低木層によくみられる樹種である．山地林の高木層の優占種となるオキナワウラジロガシを標徴種とするオキナワウラジロガシ群集は潮風などの影響を直接受けない島の内陸部に分布し、西表島では各河川に沿って地域的にシロミミズ、イヌガシ、イリオモテムラサキ、マンリョウを区分種とするシロミミズ亜群集が下位区分される[10]．国頭村安波区の部落の北側入口にある安波御嶽の自然林は、海岸の近くに伸びる山裾の小丘状の地形に位置するが、潮風の影響の小さいなだらかな裏側斜面地にイタジイが優占し、高木層にオキナワウラジロガシやホルトノキ、ハゼノキ、モチノキ、イスノキなどが混生する山地林の奥山の様相を示している．その低木層には山地林を特徴づけるシシアクチはじめ、ボチョウジ、アデク、ギィマ、ヤマヒハツ、またイヌガシなどが生育し、海岸に近いせいかシロダモ、ハマイヌビワなども出現する[11]．沖縄島北部の山地、通称山原の脊梁山脈の主体をなす伊部岳、与那覇岳、伊湯岳の海抜約300m～460m付近にイタジイ優占林が発達するが、それらの林分の高木層から低木層にはイヌガシが広く出現する[12]．

琉球列島の祭祀植物から希産種として外されたであろうサカキやシキミと異なり[1]、里山に普通に産するイヌガシはその形態的な特性と合わせて沖縄の奥区のシヌグ祭祀植物に適合するものとなったと思われる．奥区シヌグの杖棒に供用される樹種については、これまで同じクスノキ科のアオガシ、ヤブニッケイ、シロダモなどの報告があるが、これらの樹種は用いられた形跡がなくイヌガシの誤りと思われる[1]．

和名イヌガシは、犬ガシでカシと似ているが本物ではないという意味であるとされるが[13]、その他ハナニッケイ、ホソバノシロダモ、ベニバナコガノキ、ヘウインサイトキ（朝鮮）、紅桂、春桂、花肉桂の名がある[14]．イヌガシは中国内陸には産しないが、イヌガシが属するシロダモ属の樹木は新木姜子属（Neolitsea）で大陸に13種、台湾に9種を産する[15, 16]．中国産の新木姜（Neolitsea aurata(Hayata) Koidz.）とされる樹種は、シロダモの品種（f. aurata(Hayata) Kitam.）[8]、また品種（var. aurata(Hayata) Hatusima）[9]のキンショクダモとなっている．因みに木姜子属（Litsea）はクスノキ科ハマビワ属で日本に4種産し、そのうち琉球列島にはアオモジ、バリバリノキ、ハマビワの3種を産する[8, 9]．

琉球列島のイヌガシの方言名は、ハッグワシダラ（奄美大島）、ヤマスダラ（徳之島）、ファグワーハナガ（沖縄辺土名）、バテンギー（沖縄世富慶、久志）、シザールギ・ビキシザール（石垣川平）がある[17]．同じクスノキ科でクスノキ属（Cinnamomum）のヤブニッケイの方言名はシダラ（奄美群島）、スダラ（奄美大島）、ヒダラギ（徳之島、与論島）、シジャラ（沖縄与那）、シバキ（沖縄島）などで、またシバニッケイはヤマシダラ（奄美大島宇検）、ハッカグヮギ（奄美大島笠利）、ヤマヒダラ（徳之島）、シザキ（伊平屋列島、西表島）、ファグワーシバキ（沖縄与那）、ファグワーハナガ（沖縄辺土名）、シバキ（沖縄東江、久志）、シザルキ・ミーシザル（石垣川平）、シザリ（西表島）などといい[17]、イヌガシの方言名は各島のヤブニッケイ、シバニッケイの方言名と関連しているようである．

奥区の方言名は、ヤブニッケイがヒダーラ、ヒダーラギー、シバニッケイがシバヒ、ファヌクヮシバヒと呼称される．シロダモがシバヒ、ウフバーシバヒ、イヌガシがシバヒ、ファヌクヮーシバヒである[18]．イヌガシの方言名はシバニッケイと異種同名となっているが、奥区のシヌグ祭祀の杖棒に用いる樹種はイヌガシ1種で、ヤブニッケイやシバニッケイと混同して用いられることはない．シバヒの方言名呼称は、奄美群島、沖縄群島、八重山群島の各島のイヌガシ・シロダモ・ヤブニッケイ・シバニッケイの方言名に付いている、スダラ、シダラ、ヒダラ、シジャラ、シザキ、シバキなどと共通し、里山の雑木林や薪炭林などを構成する多様な樹種を代表する漢字名の柴木を意味するものと思われる．奥区のイヌガシの方言名ファヌクヮーシバヒは、ハッグワ（奄美大島）、ファグワー（沖縄辺土名）と同じで、ファヌクヮが葉の子つまり“葉が小さい”を意味し、ヤブニッケイやシロダモより葉が小さいことに由来するであろう．逆にシロダモのウフバーは大きな葉の意で、シロダモの葉がイヌガシの葉より大きいことに由るものであろう．ヒは木の表記で、奥区で木はキ、ギ、ギー、ヒと発音する[18]．

イヌガシの形態と性質

初島は[4]、イヌガシは常緑高木で樹高15m、直径30㎝に

達するとしているが、山地林でこのような大径木に出会うことはごく希であろう．イヌガシは琉球列島の里山に多産する樹種であるが、同じシロダモ属に属する高木性のシロダモと異なり、森林で高木となり中～大径木に至るのはごく希で、普通に見られるのは樹高４～5m、直径 5～6 ㎝くらいの亜高木～低木である．本種の木材は主に薪炭材に使われ、柱・梁など主要な建築材としての有用性は低いと思われる．高木性のシロダモの用途は種子から油をとって灯火用とし、ろうそくの原料にするほか、器具材、庭木、防風樹、屋内緑化樹とするが、小高木性のイヌガシは庭木、建築材、器具材、薪炭材とし[19]、樹皮は線香原料にするという[20]．

幹や枝は、同属のシロダモは樹勢が強健で剪定に耐え[19]、イヌガシは奥区の山師の話によるとよく萌芽して再生するといい、またイヌガシ、シロダモはろうそくや線香の原料になるので可燃性が高いと考えられ、沖縄ではかつて薪炭用によく伐採され利用されたであろう．イヌガシは心材・辺材ともに鮮淡紅色で、材はやや堅硬、割裂困難であるが、奥区シヌグの男神の経験豊富な年輩者の話では手折れ易いといい、これらのことが、高い萌芽性と木材利用とくに薪炭材に多用されたことと合わせてシヌグの祭祀植物にされた大きな理由の一つと考えられる．奥区シヌグの杖棒に用いられるシバヒは、「やんばるの祭りと神歌」の中でヤブニッケイの木のことで大きく成長する樹種だがサクギー（柔らかい木）なので簡単に折れるとあるが[21]、高木性のヤブニッケイの一般的な方言名シバキをシバヒと解したことからくるイヌガシの誤用であろう[1]．同属のシロダモの樹形や枝葉はイヌガシと酷似するが、シロダモはイヌガシと比べて葉が大きく、高木性で幹が太くなるので手折れ難く、またヤマジーとシバシジにはシロダモがほとんど見えないことから、シロダモがシヌグに供用されない要因の一つであろう．

イヌガシの葉序は互生であるが、葉はシロダモと同じように枝の先の方に束生・叢生状に着き、この様子を蓮の花に例えてシヌグ祭祀植物の蓮型に分類された[1]．堀田ら[22]によると、ハス科のハス（蓮）は池や水田、堀などに栽培される多年生草本で仏典の花としてなじみ深い植物であり、古い時代に大陸から渡来したようである．ハスの根茎は泥中をはい、葉は長い葉柄を伸ばして水面に浮かび、葉身は円形、直径約 30 ㎝で葉柄に楯状につく．花は夏に咲き、花柄の上に単生し、花弁は多数、淡紅色だが、濃淡はいろいろで白色のものもある．ハスは、「生みだすもの」として生命の母胎である水や大地の生産力の象徴とされ、また「浄土」と結びつき蓮華の生ずる蓮池は極楽世界の描写の中心をなすとされる．イヌガシの葉序の束生・叢生・輪生状のかたちは、ハスの花のイメージから村落民のこの世の共生共栄をも内包されているように感じられる．

泥沼地の水に浮かんで、花柄の頂上に多数の花弁を開く大型の清浄なハスの花は仏花にふさわしく、イヌガシの常緑性で全縁の数枚の単葉が枝先に叢生するすがたをハスの花に例えて蓮型とされた．シヌグ祭祀植物の蓮型は、日本の照葉樹林域の主要な祭祀植物である常緑小高木種のシキミ（シキミ科）と針葉樹で常緑高木種のコウヤマキ（コウヤマキ科）を一緒に組み入れたものである[1]．シキミの葉は枝の各節に輪生状に集まり、コウヤマキは長枝と短枝の別があり針葉は長枝に輪生する短枝に多数ついている状態となる[8]．シキミは「関西では古くからハナノキといい、仏前に供え、葬式には枝を束ねて竹筒に挿して配列する．枝葉の香気で死臭を消すためという」とあり、コウヤマキは「高野山では仏花に毬果をつける枝を用い、京都ではうらぼんにミソハギ、ハスとともに仏花とする」という[8]．霊前や仏前の供花には、その他キク、ケキョウ、オミナエシ、シナノナデシコ、ワレモコウ、オニユリ、ナデシコ、ススキ、ハギ、ユウスゲなどがある[23]．

イヌガシの葉は常緑性、単葉・全縁でシヌグの祭祀植物の性質を備え、照葉樹の名の由来から分かるように表面は緑色で光沢がある。イヌガシの葉の寿命は２～3 年あるので、シキミやコウヤマキのように、各節に叢生する葉が連なることがあり、また葉身の基部から発する葉脈は著しい 3 行脈となる[8]．シヌグ祭祀植物のなかで単葉が光沢－3 行脈の特徴をもつ樹種は他にクスノハカエデやヤブニッケイがあるものの[4]、これらの特徴が祭祀植物としてどのような意味があるかは分からない．対馬では、単葉の 3 行脈をもつヤブニッケイ、イヌガシ、シロダモを区別しないで、3 樹種をトウノキと呼んでいるようだが、これは唐の木の意でどことなく異国的な風貌をもつことからであろうとする[24]．しかし何となく異国的情緒があるにしても、沖縄のシヌグ祭祀の他に、これら 3 樹種を神仏祭祀に供用するところは見当たらない（図６）．

図６　イヌガシ；杖棒の枝葉と枝端に束生する葉（2011 年）

イヌガシの杖棒

奥区シヌグのフーヨーサレー行事では、男たちはまずその日の朝ヌンドゥルチで祈願して、ヤマジーとシバシジでそれ

ぞれイヌガシの立木を大きく7回揺すって倒す．その後ゴンズイのハブイを被りイヌガシの葉群を着けた幹・枝を担いだ男神たちの隊列は、「フーヨーサレー」「へーへーサレー」を掛け交わしながらアサギマー、シヌグモーで左に本来7回回るが、その真ん中に干支の丑人と未人が立ち、イヌガシの2m長くらいの幹・枝を持って地面に立てる．それらの様子は、奄美大島秋名のショチュガマ[7]、木曽の鳥総立て[25]、柴刺し[26]、焼畑の再生思想[27]に通うようなものがある気がする．

ショチュガマは「前面に掘立柱を二本立て、ワラ葺きの片ひら屋根の十畳敷ほどのもの、二本柱は割り竹とボウ（ダンチク）の枝を付けて大きな稲穂状に作る．・・・(中略)・・・山に太陽が昇り始めるとショチュガマの屋根に上った百人ほどの人数は歌に合わせて、屋根を右に左に揺りはじめる．足と膝に力をこめて右に左に揺すって終に揺り倒してしまう．このショチュガマを揺り倒すのは小屋の両端の稲穂の作り物がよく実って畔を枕に倒れる様を表すのだと言う」と記す[7]．稲荷大社の「験の杉」は早春の米作予祝の祭りで、杉の小枝は神木だが、その枝葉を稲穂に見立てたものであるという[26]．

奥区のシヌグは里山で、イヌガシの樹形がよく茂るほど枝葉がついた立木を探し出し、たわむばかりに実る稲穂のように左右に7回揺すって倒すようにもみえる．つまり、「揺する」行為は、田地・畑地の稲穂や農作物および里山のものが“倒れるほどに豊かに実る”という共通の願いが込められていることが考えられる．この願いを神へ伝えるには、鋸や刃物を使うのではなく、神あるいは祖霊の子である人の生の力で揺り倒すのが大事なのであろう．イヌガシの、束生・叢生するその葉序が蓮や菊などの仏花や、さらに豊かに実る稲穂のすがたを表し、萌芽蘇生を確かなものとし揺すって倒す仕草が繁栄、豊穣への感謝・予祝を意味するとすれば、奥区の先人たちの自然万物に神が宿るとする知徳を想い起さずにはいられない．

富山によると[25]、木曽の「鳥総（とぶさ）立て」は『万葉集』や『延期式』にも記されている古い神事で、江戸時代から最近まで受けつがれてきたものらしい．「木曽の杣夫たちは山仕事にかかる直前、老樹の根元に榊を立て、しめ縄を張り、御酒を捧げ、「お日待ち」といって一日仕事を休んで通夜をして、山の神に作業中の安全を祈る．」このような敬虔な儀式を月一回行い、伐採にかかるときは「木の根もとを斧のみねでこつこつとたたき、鳥やリスがとび出せば、その日はその木を伐るのを止めた．」という．山の生態を見守る人たちの、純粋な感情が神と祈りの習俗へつながるのだろう．

鳥総立ては「株祭り」の儀式で、木曽の杣夫たちは根株の中心にその木の梢をさし立てて、山の神に感謝するが、その意味は一本の木の中間部だけ、神からいただくというものである[25]．野本は[27]、鳥総立ては山間地に生きる焼畑農民の「樹木再生祈願」の信仰心につながるもので、根株に梢をさし立てた形状は樹木の再生した図柄であるといい、「それは、丁度、アイヌの熊送りにおいて、熊が毛皮・肉・胆などをもって人間界を訪れ、それらを人に恵んだ後、魂は神の世界に送られて、時を経て肉体を復活させ、再度人間界を訪れるというのに似ている．樹木の中間に木霊はとどまらず、人は木霊のぬけた木材を山の神から恵まれる．木霊は山にとどまり、根株に梢が挿し立てられたような形に、やがて再生復活すると考えられた。」とする．

樹木の幹・枝を地に立てる・挿すのは、柴刺しと同じ意味だとする考え方もある[26]。柴を神へささげる意義は「お爺さんは山へ柴刈りに行く・・」という竜宮童子の昔話にあるとされている．爺さんが刈り取った柴を淵や洞穴に投げ込むと、その水界、つまり竜宮から使いがやってきて柴のお礼に爺さんを招待し、爺さんは帰りに土産として竜宮童子と呼ばれる子供をもらい、竜宮童子から幸運を授かるのである．淵や洞窟を通じる竜宮という水界は大地の底にある別天地で、爺さんの投じた柴は年木であり、年木は水界の年神にささげられたものである．山は大地のエネルギーが噴出したもので、大地の女性原理、母性原理を表出し、山は古人にとって万物を産み出す宝庫と考えられ、その柴は山の霊力を帯びたものである．農作物は大地のめぐみ、豊穣力によって生まれ、その源泉は母体である山そのものにあり、春山入りで山の霊力の象徴である花や柴を持ち帰るのは、それを神にささげて福徳をさずかるという予祝儀礼が反映されているとみている．竜宮童子の昔話は、正月の神祭り、水神信仰、春山入り、そして焼畑農民の柴祭りなどがからんで複合的につくられたもので、日本文化における柴や柴刈りの意味の大きさが実感されるという．

根は木の一部であり、大地の一部である．鳥総立ての儀式で根株に柴の梢を挿すのは、梢に宿る木霊を山の神に返すという意味をもち、大地・山の神の霊力をもつ梢の死と再生が成就され、木は大地に蘇るのである．琉球のニライカナイ信仰の「ニ」は「根の国」であり、根は大地の豊穣力のシンボルともいえ万物を産み出す地の底の別世界と通じ、水界は大地の底に比定された異界で川の淵や洞窟などはその入口である[26]．木は大地や山の一部を成し、柴、根、梢は万物を産み出し再生する大地の神の霊力を宿し、根は万物の生命の根源となる水界へ通じる地のシンボルということであろう．

樹木再生の民俗は各地方にみられる[27]．焼畑民俗の「クナ」は「忌み」を示し、休閑に入った焼畑地にみだりに入ることを禁じたもので、樹木の再生する期間、とくにその初年度は焼畑地の樹木の成長を願って踏み込むことを謹んだ信仰論理にそったものではないかという．また旧歴二月七日を入山禁止とする言い伝えがあり、照葉樹林域の和歌山県、静岡県などの山間地にみられるようで、このような「物忌み」は樹木の蘇生、新しい樹木の誕生を祈る日本人の自然観がみられ、人間自身の再生観に影響を与えてきたのではないかとしている．宮崎県の「木おろし唄」は、焼畑のために森林の樹木の梢や枝を伐りおろす作業で、儀礼的な意味があり、幹の梢「セビ」を伐ったものを立てる形と、枝を伐り落として梢を残した木をそのまま伐らずに残す方法がある．「セビ」を立てるのは木曽の鳥総立てと同じもので、梢は木の再生の象徴である

と考えられている[27]．

安田シヌグは、男神たちが山登りの現地で円陣を作り、左に回りながら柴で地面を叩きスクナーレ・スクナーレと唱える．奥シヌグではシヌグモ―でハブイを被り神木のイヌガシの柴を担いだ男神たちが円陣を組んでフーヨーサレー・ヘーヘーサレーと掛け合い、おそらく山の神と交信しながら左に回り、その円陣の中央にいる３人ほどの男神がイヌガシの長い幹・枝の柴を地に立てる（図７）．柴で地面を叩き、イヌガシの柴を地に立てるのは、「鳥総立て」や「セビ」を立てる儀式とその根底に潜む同じ山里の地の土着信仰に結びつき、山の樹木の再生、畑地の作物の再生・豊穣のために、その恩恵を感謝して、循環する生命の保続を希い、草木が芽を出す生命の母胎である大地と山の神に部族の福徳を祈願する仕草であると思われる．杖棒にする木の梢や枝葉の柴には山の神の霊力があり、村落民のシヌグ祭祀を通して柴の杖棒で地を叩き地に立て、柴刺しによって、地の神をよび起し、天地の生きとし生けるものの再生を祈り、農作物の豊穣、部族の世の幸福と平穏を願うのであろう．

図７　円陣の真中に２、３人の男神がイヌガシの杖棒を立てる（2011 年）

2011 年８月 25 日のシヌグ祭祀の時に、ヤマジーで揺すり手折って倒したイヌガシ３本の根株の跡を１年経った 2012 年８月８日観察した．１本は根株の上部がほぼ枯れて下部より萌芽しており、他の２本は根株の長い幹の中途に小さな萌芽枝があり下部で盛んに萌芽していた（図８）．2013 年８月 25 日のシバシジ班はイヌガシ３本を揺すり倒した後鋸で伐り直したが、これは萌芽し易いためだと聞いた．イヌガシは小高木性で、主な用途は薪炭材であろうが、シヌグ祭祀植物に供用される性質の大きな条件として、木の大きさが杖棒に適するものであること、手折れ易いこと、よく萌芽することが挙げられると思われる．照葉樹林域の暮らしには山の恵みの木をいただいて利用するという民俗があり、その方法の一つに再生をくり返す樹木の「ヒコバエ」「萌芽更新」の活用がある[27]．沖縄の山原の山は、王府時代にはイヌマキ、モッコクなど主要な林木の禁伐制度や造林施業があったが、村落民の山の木の利用の仕方には、土着信仰の原初から山の樹木の恵みはほとんどがヒコバエの萌芽更新による天然生林の育成にあったのではないかと考えられる．村落の古人が自然を尊び、山の霊力を崇拝するおよそ原初信仰のすがたを思い描いてみると、シヌグ祭祀の杖棒の振る舞いは、男神たちが神の意に沿うように力強く木霊の声を唱え掛け合いながら、大地の山から萌え出る生命の再生を希求する村落民の血族の永続思想にあると推察される．柴とする立木やショチュガマの揺すり倒しの豊穣祈願を合わせ、山の樹木や農作物の再生をもって、その恵みをもたらす始祖神、神への感謝、厄祓い、幸福、子孫繁栄を、そしてイヌガシの杖棒は「生みだすもの」「浄土」につなぐ葉序のかたちの蓮型が村落民の安寧と存続の祈りに結びつくものとなるのであろう．

図８　手折ったイヌガシの根元で盛んに萌芽する（ヤマジー、2012 年）

佐々木によると[28]、照葉樹林帯の森林はカシ、シイ、クス、ツバキなどを主な構成樹種として、ヒマラヤ山脈の南麓部から、アッサム、東南アジア北部の山地、雲南高地、江南地方の山地をへて日本の西南部に至る、東アジアの暖温帯の地域に広がり、これらの地域の初期農耕文化は紀元前 5000 年紀末以降に、インドから雲南をへて東南アジア北部の地域に及び、東南アジアの大陸部においても雑穀やイモ類を主作物として起こってくる．日本の照葉樹林域は、気候条件や伝統的農業の作物構成の特徴から、稲作以前の段階には《雑穀とイモの文化》ともよべる焼畑農耕文化が広く分布していたと考えられている．そして稲作文化を象徴する弥生式土器は、九州から沖縄へ南進しており、その逆ではないとし、さらにイモ類や雑穀類を主作物とする文化が南島を北進していった可能性が強いとみなされている．

原初のシヌグ祭祀が稲作以前の焼畑農耕文化に起源するものとすると、男神たちのショチュガマやイヌガシの“揺すり倒し”や柴の“地を叩く・地に立てる”行為は、稲穂ではなく稲作以前の雑穀の穂の豊かな実りを表すものとなろう．そうなると、「海上の道」[29]はイネではなく雑穀やイモ類の栽培やその文化の北進になり、折口[30]は古い柴のサカキはタブノキという南海から移植された熱帯性の木を示すものであろ

うといい、タブノキの分布する西日本の沿海域における常世神の漂着を想定されたように、シヌグ祭祀は中国や東南アジアの焼畑農耕文化に由来することも考えられよう．紀元前5000～6000 年紀に及ぶプレ農耕段階にはすでにウルシを用いる技術があったとされている[28]．折口[30]の「漂浪する巫女の神語りとしての文学は、古代の海部―或は、山部―其後の『くゞつ』『ほかひ』から、近代まで筋を曳いている」というのがあり、また佐々木[28]の「イザナキ・イザナミの国生み神話の形成には、焼畑民の間にみられる古い儀礼や習俗のほかに、海人（あま、つまり漁撈民）の文化が深くかかわっている」というような見方がある．照葉樹林域における焼畑農耕民族の雑穀やイモ類の栽培、さらに山地を移動してウルシ用のハゼノキの樹液を採取して廻る山部たちの農耕文化が、日本西南部と琉球の山間村落民の生活および民俗をつなぐものになったのではないか、アマミキョは山部が海部の文化にかかわった形跡がないか、再考の可能性が潜んでいるように思われる．

奥シヌグ祭祀に快く参加を許され調査にご協力いただいた奥区の人たちに心より御礼申し上げる．また奥区の多くの人に、シヌグの話や杖棒のイヌガシの話を聞く機会を与えられ、とくに奥区の民俗に造詣の深い島田隆久氏にはシヌグ研究について多大なるご教示をいただいた．併せて深く感謝申し上げる．

引用文献

1）　新里孝和「沖縄シヌグ神祭の植物観」2013 年、名護博物館紀要「あじまぁ」17、pp41-64、沖縄

2）　新里孝和「国頭村安田シヌグの祭祀植物ゴンズイ（Ⅰ）」2014 年、琉球大学農学部学術報告、61、pp49-60 沖縄

3）　新里孝和「国頭村安田シヌグの祭祀植物ゴンズイ（Ⅱ）」2014 年、琉球大学農学部学術報告、61、pp61-72 沖縄

4）　初島住彦「琉球植物誌（追加・訂正）」1975 年、沖縄生物教育研究会、沖縄、pp287-291,386-387

5）　折口信夫「日本文学啓蒙」（全集第十二巻、国文学篇６）、1966 年-1、中央公論社、東京、pp391-478

6）　奥区事務所「奥のシヌグ行事のしおり」2007 年、国頭村奥、沖縄、pp2

7）　小野重郎「生態史としての南島文化」（沖縄文化研究 14）1988 年、法政大学沖縄文化研究所紀要 14、法政大学沖縄文化研究所、pp1-53

8）　北村四郎・村田　源「原色日本植物図鑑・木本編（Ⅱ）」1980 年、保育社、大阪、pp183-188, 209-210,422-423

9）　初島住彦・天野鉄夫「増補訂正・琉球植物目録」1994 年、沖縄生物学会、沖縄、pp62

10）　鈴木邦雄「琉球列島の植生学的研究」1979 年、横浜国立大学環境科学研究センター紀要、第 5 巻第 1 号、pp87-159

11）　諸見里秀宰・新里孝和・仲田栄二・比嘉　寿・玉城豊春・新里隆一・比嘉政樹・島本杯仁「社寺林の研究・６（静岡・長野・広島・沖縄）」の沖縄の部、1977 年、森林・第 6 号、土井林学振興会・緑地研究会、東京、pp183-235

12）　沖縄県教育委員会「沖縄県天然記念物調査シリーズ第 28 集、国頭郡天然記念物緊急調査Ⅱ、沖縄島国頭地域の現存植生図」1987 年、沖縄、pp2-4、表 1-3

13）　牧野富太郎「牧野新日本植物図鑑」1968 年、北隆館、東京、pp194

14）　上原敬二「樹木大図説・第Ⅰ巻」1981 年、有明書房、東京、pp1177-1179

15）　中国科学院植物研究所「中国高等植物図鑑、第一冊」1972 年、科学出版社、中国、pp849-852

16）　劉業經「国立中興大学農学院叢書第六號、臺灣木本植物誌」1972 年、国立中興大学農学院出版委員会、pp159-162

17）　天野鉄夫「琉球列島植物方言集」1979 年、新星図書出版、沖縄、pp40-42

18）　新里孝和「国頭村奥の植物方言」2012 年、名護博物館紀要「あじまぁ」16、沖縄、pp45-46

19）　橋詰隼人・中田銀佐久・新里孝和・染郷正孝・滝川貞夫・内村悦三「図説実用樹木誌」1993 年、朝倉書店、東京、pp158-159

20）　天野鉄夫「琉球列島有用樹木誌」1982 年、琉球列島有用樹木誌刊行会、沖縄、pp36

21）　名護市史編さん室「やんばるの祭りと神歌」1997 年、名護市教育委員会、沖縄、pp242-2157

22）　堀田　満；代表「世界有用植物事典」1991 年、平凡社、東京、pp708-710

23）　長澤　武「植物民俗」（ものと人間の文化史 101）2001 年、法政大学出版会、東京、pp276

24）　前川文夫「植物の名前の話」1998 年、八坂書房、東京、pp110

25）　富山和子「水の文化史」1981 年、文藝春秋、東京、pp182-185

26）　狩野敏次「昔話にみる山の霊力―なぜお爺さんは山へ柴刈りに行くのか―」2007 年、雄山閣、東京、pp170-171, 27-51、9-10,196-198,56-61

27）　野本寛一「生態と民俗　人と動植物の相渉譜」2008 年、講談社、東京、pp311-328

28）　佐々木高明「照葉樹林文化の道－ブータン・雲南から日本へ」1983 年、日本放送出版協会、東京、pp11-19,84,30-31,85-86、242-244

29）　柳田国男「海上の道」1982 年（第 1 刷 1978 年）、岩波書店、東京、pp13-56

30）　折口信夫「古代研究」（全集第三巻、民俗学篇２）、1966 年-2、中央公論社、東京、pp514-517